

港区史編さんだより

～ 区民の皆さんと歩み、歴史を語り継ぐ～

発行：港区総務部総務課区史編さん担当

〒105-8511 港区芝公園 1-5-25/TEL 03-3578-2049/<https://www.city.minato.tokyo.jp/>



今号の表紙

浜松町と空港を結ぶ東京モノレールの開業は、オリンピックを目前に控えた昭和39（1964）年。この写真はその3年後の昭和42年、現在の芝浦公園付近（芝浦一丁目）から南を向いて撮影したものです。1990年代、写真左側には、一世を風靡した「ジュリアナ東京」がありました。

モノレールは開業後半世紀以上経ち、現在は高層建築が並んでいますが、橋脚などの構造物は当時のままです。（モノレールが通る芝浦周辺の変化については『図説 港区の歴史』7章8節をご覧ください）



目次

Pick Up 近代の港区域——学童疎開・・・P2

写真で振り返る あの日・あの時・・・P3

Zoom Up 『デジタル版港区のあゆみ』リニューアル・・・P4

Pick Up 近代の港区域—学童疎開

本年3月に『港区史』通史編近代を刊行しました。まだお手にとられたことがない方のために、本コーナーでは、通史編近代に関連した資料を紹介します。

■ 学童疎開

アジア・太平洋戦争の戦況が悪化し、空襲への対策が急務となった昭和19(1944)年。危険な都市部から比較的安全とされた地方に子どもたちを移動させる学童疎開が始まりました。当初は地方の親類縁者を頼る縁故疎開が推奨されましたが、政府の思惑どおりには進まなかったため、国民学校*の児童たちが親元を離れて教員とともに集団生活を送る学童集団疎開が始まりました。疎開先は、芝区が栃木県塩谷郡、麻布区が栃木県南部(佐野市や足利郡など)、赤坂区が東京都内の北多摩郡・南多摩郡でした。学寮と呼ばれた宿舎には寺院や旅館などが充てられ、そこから疎開先の国民学校に通いました。



(*) 昭和16年、国家主義・軍国主義に基づく初等教育を目的として小学校が国民学校に改組された。昭和22年の学制改革により新制小学校・中学校となった。

栃木県塩谷郡塩原町に疎開先の桜田国民学校の児童たち
(左:BCG接種を終えた女兒、右:食後に皿洗いする男児)

集団疎開は子どもたちを空襲被害から守ることを目的としていましたが、あくまで総動員体制下における学童の「戦闘配置」という位置づけでした。疎開先によっては、食糧不足や感染症に悩まされたことが知られています。

昭和20年8月、戦争は終結しましたが、焼け野原となった東京にすぐに帰宅というわけにもいかず、全員が自宅に戻れたのは翌年になってからでした。

昭和30年代、(旧)『港区史』編さんにあたり、港区教育委員会は集団疎開の調査を実施しました。この際小学校教員により提出されたレポートは、直接体験が反映された貴重な資料です。集団疎開の体験を語り継ぐ活動は現在も各地で続いており、港区内での近年の活動もテレビや新聞に取り上げられています。

疎開先からの引揚げ完了を
記す芝小学校『沿革誌』



戦後、小学校教員により
書かれた集団疎開の記録
(赤羽小学校)



集団疎開について詳しくは、『港区史』近代(下)、『港区教育史』通史編⑤もぜひご参照ください(また疎開先の自治体史にも多くの情報があります)。

『港区史』好評販売中

販売中の『港区史』

- 自然編
- 図説「港区の歴史」
- 通史編
 - 原始・古代・中世、近世(上・下)、
 - 近代(上・下)

※通史編現代、資料編は続刊!!

■ 販売場所

港区役所 区政資料室
麻布地区総合支所 赤坂地区総合支所
高輪地区総合支所 芝浦港南地区総合支所
港区立郷土歴史館

港区立の各図書館でもご覧いただけます



「デジタル版 港区のあゆみ」では、港区に関連する写真資料を集めた「写真でみる港区のあゆみ」を公開しています。テーマ別・年代別・エリア別に、街並みや行事の様子など港区域の今昔をご覧ください。本コーナーでは、その一部をご紹介します。



■本芝公園



埋立前の雑魚場の風景 昭和42年頃



埋立て工事準備中の雑魚場への水路 昭和42年頃



芝区の海沿いは漁師町でした。明治後期以降、海が埋め立てられて芝浦地区が造成されると、漁業は盛衰を繰り返しながらも徐々に衰退していきました。

かつて魚が水揚げされ「雑魚場」と呼ばれた田町駅の北の船溜まり（上の写真）は、線路の下の水路を介して新芝北運河（表紙の写真の場所）につながっていました。戦後の高度成長期まで残されましたが、漁業の衰退により使われなくなり海水が滞留したため、昭和42年頃埋め立てられ、その後、港区立本芝公園となりました。（右の写真）



本芝公園 令和4年

編さん委員会、古代・中世部会を開催しました

■ 考古部会

令和4年6月18日

■ 近世部会

令和4年7月5日、8月4日、8月17日

■ 近代部会

令和4年6月29日

各部会において、資料編の構成やスケジュールなどを確認しました。

区民インタビューを公開しました

昨年度撮影した「区民インタビュー」の動画を公開しました。インタビューに答えてくださったのは、野尻三重子さんと小林元子さんです。

「デジタル版 港区のあゆみ」の、「動画でみる港区のあゆみ」から、どなたでも見ることができます。是非ご覧ください。



野尻 三重子さん



小林 元子さん



令和に刊行する『港区史』は、インターネットでも公開しています。
 どなたでも、どこにいても『港区史』やその関連資料を閲覧することができます。
 8月末に、主に検索画面のリニューアルを行いました。より使いやすくなった『デジタル版港区のあゆみ』
 について、ご紹介します。

検索画面が変わります！

これまでの検索結果画面では、資料名が一覧で表示されていました。(図1)

リニューアル後は、図2のように、検索結果画面で資料画像が大きく表示されます。どのような資料が掲載されているか、よりわかりやすくなりました。画面右上のマークから、検索結果の表示方法を変更することもできます。リニューアル前の資料名一覧での表示も可能です。

詳細検索画面(図3)では、「目録」「テキスト」「年表」などのコンテンツごとに任意のキーワードでの検索ができます。

図4の例は、「震災」で検索した結果です。
 検索キーワードはハイライトで表示されます。

図1 リニューアル前



図2 リニューアル後

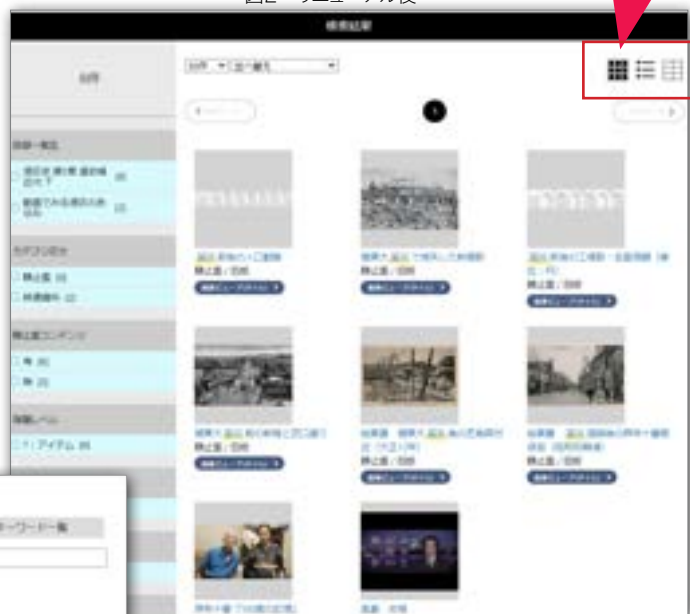


図3 詳細検索画面

図4 本文検索結果

港区史 第3巻 通史編 近代 下
 (震災前後の工場の動向)
 ※詳細情報無し
 震災前後の工場の動向 第一次世界大戦時に増加した港区域の工場は、震災によってどのような被害を受けたのか、その後の復興の状況も含めてその動向をみていこう。『芝区誌』に掲載されている震災被害の工場調査では、大正一二年八月時、芝区内、愛宕警察管内の工場五七三のうち、火災による全壊が五五四と大部分が被害を受けた一方、三田管内六九八のうち、七八が全壊、高輪管内三九八、震災後の復興については、東京府全体で工場数が大正一五年、職工数は昭和三年(一九二八)に震災前の水準を回復している。震災後、東京市周辺の都市を中心に工場が増加することが指摘されている。一方、震災の被害を受けた市内の工場群は短期間には食の需要を受けたものの、復興過程で元の場所での復活を遂げた工場が多かった。震災からの復興需要の存在もこうした動きを促したのであろう。第一次世界大戦後、長期的な工業発展が続くなかで起きた関東大震災は、短期的な工場数の減少といった影響を及ぼした。/ 震災前後の工場の動向

図4 本文検索結果 ハイライトの表示の色は変更予定です



編集後記

今号では、新しくなった『デジタル版港区のあゆみ』をご紹介します。刊行中の『港区史』は、刊本でもWEBでも公開しています。ぜひご覧ください。

通史編現代の編集作業が進んでいます。いよいよ、通史編最後の巻です。2023年3月の刊行予定、お楽しみに！